

---

# 葉月が死んだ日

未ちる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葉月が死んだ日

### 【NNコード】

N3570D

### 【作者名】

未ちる

### 【あらすじ】

夏休みの最終日、僕は信じがたい知らせを受けた……

(前書き)

短編ですが、「死」をテーマに扱った内容です。  
直接的な描写はありませんが  
苦手な方はスルーしてください。

知らせを受けたのは、田の暮れかけた夏の終わりだった。  
甲高い声で電話を受けた母の口調が、にわかに強張つていく。  
僕はそれに気がつかないふりをしていた。

夏休み最終日。

夏の終わり、なんていうのは暦の中だけの話で  
うだるような暑さはしつこくこの肌に纏わりついて  
じつとりと不快な湿り気を帯びていた。  
あまりにも気持ち悪くてすぐにでも着替えたかったのだけど  
母の電話のやり取りを聞いてからは何故だか動けなくなっている僕  
がいた。

夏バテのせいなんかではない。

無闇に動いてはいけない気がしていたから。

静かに受話器を置いた母は、普段なら考えられないほどのか細い声  
で事を告げた。

「葉月さん、交通事故で亡くなつたって」

葉月は同じクラスの、比較的おとなしい子だった。

他の女子と一緒に馬鹿騒ぎをするような子ではなかつたけれど  
いつでも温かい眼差しを向けてにこにことしていた印象はある。  
母は親同士で仲が良かつたらしいのだけど  
僕にとってはただのクラスメイトだった。

よつによつてこんな日。

食卓の上に乗ったホールのケーキを思い出す。

甘いものはそこまで好きではない。

けれど、母が持つて帰つてきたそれは苺が乗つてクリームの付いたごく普通のもので

いかにも美味しそうにテカテカと光つていた。

反抗期はとっくに終わつている。

今日の日を祝つてくれる彼女もいない。

就活の真っ只中、束の間の休息。

1年に1度くらいなら悪くはないと思つていたのに。

祝いに水を差された格好になつてしまい、少し気が滅入る。

だけど、何となく現実のことのように思えなかつたのも事実だつた。夏休みが始まると、葉月は変わらずに皆と混じつて微笑みを浮かべていたはずなのに。

やけにしひれると思つていたら

僕の両手は微かに震えていた。

それに気づいて、僕の背筋が冷たくなつていくのもわかつた。

明日の葬式には、葉月の親族だけではなくそれに混じつて学校の関係者も多く参列するだらう。そして同じクラスだつた女子は次から次へと誘われるようになつた。とりわけ彼女を慕つていた奴が大げさなぐらにしゃくりあげる姿が目に浮かぶ。

早く制服を準備しなければ。

クリーニングから帰ってきたばかりで、まだタグを外していないはずだ。

それに明日からは学校がある。

提出する課題に抜かりがないか今一度確かめなければ。

現実的なことを思つことで、僕は頭の中から葉月の死を追いやらうと試みる。

だけど、そんな考えも虚しく僕の頭をすり抜けていくばかりだった。

視界にふと、やつきた来たばかりの夕刊が入り込む。

僕は震えたままの手でそれを手に取つた。

頭のどこかで警告音が鳴り響く。

それでも僕は、広げた新聞を田で追つこと止めることができない。

そして僕は、ある記事に釘付けになつた。

「はみ出し衝突」

隅の方に書かれた見出しだつたのに、そこばかりが目について離れない。

そして、記事の中には

確かに葉月のフルネームが記載されていた。

死亡、の文字と一緒に。

それ以上の内容を読み取ることは出来なかつた。

ただ僕の両手が、依然として震え続けていたのはわかつた。さつきよりも、激しく、自分では止められないほどに。

どうして、

どうしてあいつが

葉月はただのクラスメイトだ。

用がなければ言葉を交わすこともない、ただのクラスメイトだ。

だけど、学校に行けば当たり前に彼女がいたのに。

今、この世に葉月は存在していない？

連日、ニュースで事故や事件が流れている。

毎日、途方もない数の人たちが無惨に死んでいく。

メディア越しでは100人も1000人も軽く受け流せるのに。

身近にいるたつた1人の死でこんなにも動搖している自分が、何だか可笑しかった。

何かを振り切るように、僕は勢い良く新聞を閉じた。

階段を駆け上がる僕を母が呼び止めた気がするけれど、到底振り返られそうにもない。

自室に鍵をかけても何も考えられず

僕は両手から全身に広がる震えに身を任せしかなかつた。

葉月は、ただのクラスメイトだ。

そして、今日は僕の誕生日だ。

葉月は関係ない。

関係ない。

関係ない、はずなのに。

気がついたら僕の頬は濡れていた。

死ぬって、何だろう。

生きるって、一体何だろう。

きっと、どんなに時が経っても  
どんなに記憶が薄れても

僕が生まれた日に死んだ葉月のことは

知らされた時の衝撃は

この生々しさだけは

一生忘れることがないのだ。

（後書き）

この作品は別の名前で某HANNAH SITEにて公開しております。  
万が一どこかで見かけた時は、クスッと笑つてスルーして頂けると  
とありがたいです。

この話はフィクションですが、寒話をベースにして執筆しました。  
私が小6の時の話です。  
事が起こったのはさすがに誕生日ではないです。  
だけどその日は12月25日。

クリスマスでした。

あの時のことは、8年経とうとしている今も尚、私に少なからず影響を与え続けています。

クリスマスになると、思い出すのです。  
例え、単なるクラスメイトと言えども。

それにして、きちんととした小説を仕上げたのは本当に久し振り！  
最後に書いたのは中学の時だからなあ。

それもほとんど描写なしの会話だけとか、都合主義な話の展開ばかりで（笑）

よつて文体もあの頃とは全く違うのですが  
当時は思うままに書き綴っていたので仕上がりも早かったのに  
これはたかだか短編小説なのに3日4日もかかってしまう。  
ブランクを感じます。

今回みたいな暗い話ではない話も、気の向くままに綴つていきたい  
です。

下手の横好きレベルだけれど、その時はまたお付き合いください。  
お好みに合えば良いのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3570d/>

---

葉月が死んだ日

2010年12月24日02時56分発行